

いる。」この電話に予報を吹込むのはお天気相談所の役目、朝から夜まで1日最低5回、荒れ時となると10数回も予報が変る度に新しく録音する、この録音設備なるものが、きわめてお粗末だ、気象台の電信室のシミで宿直ベッドなど同居したタナの上に、古いポータブルの器械がおかれている。右手でカネを合間にたたきながらの録音である。—(中略)—この設備は予報電話開始時に試験的においたまま公社側はホッタラカシ、録音テープがすり切れるとテープ会社に頼んで寄附してもらわねばならず、故障も気象台員が仕方なく修理している。」

### むすび

以上由来めいたものを冗舌につらねたが、222は多数の電々、気象台の技術者の手によって日夜遂行されており、今後ますます発展強化されるべきものである。願わくは現状の欠陥が1日も早く除かれて、公共サービスとしての面目をいやが上にも發揮するように努めていきたいし、そう運営して欲しいものである。なお222は将来1177番として全国統一番号になる予定ととき。

またニューヨークでは、電話予報が1日7万、電話時報が1日6万3千平均の呼数だということである。

(中央気象台予報課天気相談所)

### (19頁よりつづく)

云えない。具体的な研究はどこまでも実際の観測成績及び研究論文から生れるものであろう。それにもかかわらず、この試みは我々太陽活動コロキウムのメンバーが之までを回顧し今後に資する上に非常に重大な役割を演じていることは認めざるを得ない。

ここにアンケートにつきころよく回答を寄せられた数多くの方々並びに熱心に討論に参加下さった方々に心から感謝の意を表するものであります。

(気象研究所 関原記)

## 書 評

動 気 候 学 高橋浩一郎著 岩波書店  
昭和30年3月, A5—321頁, ¥850円

いわゆる綜観気候学 (synoptic climatology) に対して動気候学あるいは力学的気候学 (Dynamische Klimatologie) がある。体系的には1930年頃ベルシェロンによってはじめられたものであるが、日本では主として高橋博士が研究され、多くの労作が戦前の気象集誌に発表されている。最近長期予報や電源開発などに関連してこの方面の研究が多くの注目を浴びてきたが、まとまった著書とてなく、久しく要望されていた。

さて第1章は天候の変動の諸性質を多くの資料によって説明してある。第2章では世界の気候という題で主として理論的な面から気候を扱う糸ぐちをつけてある。第3章では日本の気候の一般論を述べ、ついで第4章から第9章まで各季節の日本の動気候を説明してあり、ここはまさに著者の独壇場である。第10章は天候の変動の原因となりうる要因をすべてあげかたんに説明してある。

本書の特徴の第1は著者の深い経験があらゆる面に、にじみでていることである。これは気象学者であり、且つ気象技術者である筆者にしてはじめてなしうるものである。第2にあるかたよった立場をもっていないから、あらゆる問題とあらゆる方法が提示されており、本書一冊で足りるということ是最も有難い点である。第3に、読者はこの本の中から無限に多くの研究課題を直ちに摺みとることができるということを強調する必要がある。同時に、ここにかかっているどの1つの理論、あるいは記述も完全無欠なものとして、信じ、理解しようと努めるならば数ページにして坐折するにちがいない。だから

何はさておき読者は買ったらすぐ最後のページまであっさりよみ通すことがのぞましい。その上で手元から放さず常に「使らう」ことが必要である。

ともかく動気候学のまとまった本として世界最初のものであるを注意したい。

(渡辺次雄)

寺田 寅彦の生涯 太田文平著 新書版 238頁  
昭和30年3月 四季社刊 150円

この書物は寅彦の生前に氏と一面識もなかった一人の愛読者によって書かれた異色のものである。著者は高商出身のビジネスマンである。寅彦の門弟の矢島祐利氏の傳記は、書翰、日記、手帳、隨筆、科学的業績などによって書いた「編集せる自傳」であるが、太田氏のは主に寅彦の隨筆にあらわれた回顧的名文によってつづられた、やはり自傳風のものである。矢島氏のものより幾分偶像化され、美化されているのは用いられた材料によるためであろう。

内容は小宮豊隆氏の序、自作品に現われた寺田寅彦の生涯—12章よりなり、本書の大部分をしめる一、寺田寅彦の装幀観、寅彦をめぐる人々と私、よりなる。

寅彦は多方面に大きな影響を与えた割合にあまり調べられ、評価されたものが少いのであるが、これは寅彦が多方面にわたる天才であり、独想の人であったために、その評価が容易でないからであろう。この書物をよまれ、寅彦に対する興味をさらに深めて、再び全集をよみかえしてみるならば、寅彦の精神がわれわれのまわりに現存する多くの門弟たちにどのようにうつがられているか、また道にどのように弟子たちによってゆがめられているか、本物とエピソードがどんなにちがうものであるか思いを新たにすることであろう。

(根本)